

黙読の仕方の個人差と読解スピードとの関係

○王 童瑤 (広島大学大学院)

藤木大介 # (広島大学)

キーワード：黙読の個人差, 読解スピード

成人の読解活動では、黙読が有利であることが知られている。しかしながら、すべての黙読を均質なものとしてひとくくりにしても良いのであろうか。Vilhauer (2016)は黙読の際に心の中で声が聞こえるか尋ね、これに対する投稿を分析した。その結果、黙読で心の中で声が聞こえる人の割合は82.5%にも上ったが、声が聞こえる場合でもその声は自分の声、知っている人の声や知らない人の声等、さまざまであることを示した。また、この声を自分で制御できるか否かに個人差があることも示した。このように、黙読の中でも心の中で声にする読みとそうでない読み等の違いがある。この違いにより、読解の速度等、パフォーマンスに差が出る可能性がある。そこで本研究では、黙読の仕方の個人差と読解の速度との関係を明らかにする。心の中で声に変換せずに読む者は発話しないために、1つ1つの文節や単語に対する注意はそれほど必要とせず、また、読解スピードが速くなると予測される。以上から、研究1では、まず、黙読の時の心の声に関する実態を検討するため、大学生を対象に黙読時の心の声に関する質問紙調査を行う。研究2では、黙読の仕方と読解スピードとの関係について検討する。

研究1

方法

調査対象者 大学生134名であった。

材料 黙読時の心の声に関する実態調査を調べるため、「心の声を聞こえるか」、「聞こえる声は誰の声か」、「声の鮮明度」(5点満点)、「聞こえる声の内容」という4つの質問からなる質問紙を作成した。

手続き 「黙読の仕方に関する調査」と説明し、授業の中で集団で調査を実施した。

結果と考察

声が聞こえると回答したのは98名(73.1%)であった(Table 1)。心の中で声が聞こえることがある人の割合はVilhauer (2016)と比べるとやや少ないが、黙読をする際は多くの人が、心の中で声が聞こえることが示された。

Table 1 声が聞こえる頻度による聞こえる声の違い(人)

声が聞こえる頻度	誰の声か			合計
	自分	知っている人	知らない人	
聞こえない	-	-	-	36
ほとんど聞こえない	13	0	0	13
時々聞こえる	34	0	13	47
いつも聞こえる	31	0	7	38
合計	78	0	20	134

また、声が聞こえる頻度毎に声の鮮明度の平均値を求めたところ、ほとんど声が聞こえない群が2.85点($SD = 0.80$)、時々聞こえる群が3.64点($SD = 1.03$)、いつも聞こえる群が4.16点($SD = 0.64$)であった。分散分析を行ったところ、声の鮮明度における主効果がみられた($F(2, 95) = 11.61$,

$p < .05$)。そこで多重比較を行ったところ、声の聞こえる頻度が高いほど、声の鮮明度も有意に高いことがわかった。この結果から、心の声を知覚できていることとその声を鮮明度を感じることは心的に同じ機序を持つ可能性を示唆している。

研究2

方法

調査対象者 大学生65名であった。

材料 平成31年度大学入試センター国語追試験の問題文(ただし設問除く、全4816文字)と研究1の内容とほぼ同様の読解に関する質問紙を作成した。

手続き 集団実験であった。まず、「読解に関する調査」と説明した上で、問題文を最初の部分から読むことを求めた。その3分後に読むことをやめるよう教示し、その時点で読んでいた箇所印をつけるように求めた。最後に、読解に関する質問にも回答することを求めた。

結果と考察

声の聞こえる頻度毎の1秒当たりに読んだ文字数の平均値を求めたところ、声が聞こえなかった群が6.71字($SD = 2.81$)、時々聞こえた群が8.33字($SD = 3.89$)、いつも聞こえた群が7.95字($SD = 3.32$)であった。また、「ほとんど聞こえなかった」を選んだ参加者はいなかった。分散分析を行ったところ、有意な差はみられなかった($F(2, 60) = 1.20, p = .308$)。これは予測とは異なるものであった。心の中で声の有無の違いを黙読と音読と違いから類推することが必ずしも妥当でないことを示唆している。次に、聞こえた声の違い毎の1秒当たりに読んだ文字数の平均値を求めたところ、声が聞こえなかった群が6.71字($SD = 2.81$)、自分の声だった群が8.02字($SD = 3.47$)、知らない人の声だった群が8.30字($SD = 3.67$)であった。また、「知っている人の声だった」を選んだ参加者は1人しかいなかったため、そのデータを削除した上で分散分析を行ったところ、有意な差はみられなかった($F(2, 59) = 1.21, p = .306$)。さらに、声の鮮明度と読解スピードの相関係数を求めたところ、おおよそ相関がみられなかった($r = -.07, p = .665$)。このように、聞こえた声の違いは読解スピードに影響するとは言えない。心の中で聞こえる声に対する主観的な評価と読みのスピードという客観的なパフォーマンスとの間には関連が認められなかったといえる。心の中で聞こえている声の感じ方は実際に心内で起こっている処理そのものを反映していない可能性がある。

引用文献

Vilhauer, R. P. (2016). Inner reading voices: An overlooked form of inner speech. *Psychosis, 8*, 37-47.

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(挑戦的研究(萌芽)課題番号:17K18620代表者:島田英昭)による助成を受けた。